

まろびゆく球のあとおふ武夫たけをらの銀ぎんの上うはぎね衣うはぎね日にきらめくも  
亂れあひもつれあひつゝ人と馬一つとなればまた解けにけり  
まかんづる人と馬とに湯氣立ちて馬場うまばしらく暮れてゆくかな

鴨頭草

河原に小さきあとつけ川千鳥悲しく鳴かんたまの夕ぐれ  
砂の上にかれ草しきて我も又千ごと共になかましものを  
たゞ一つつとまもらへし物影に秋のくるゝも知らですごせし  
野に立ちてうすき朽葉の枯草にたゞ驚きてかへり來しかな  
得ざれども能はざれどもこのころ一つを守り我はゆかまし  
くりかへしくりかへしつゝ新しく奇しくものを思ひつゞくる  
文字ならべ悲しみをやるすべしりて涙すること數まさりけり  
何となく泣かねばならぬ心して悲しきことを思ひあつむる

木かげゆけば櫻もみちのちりやままでのがれがたかる我一人かな  
かはきたる音少したて地を走る櫻紅葉の小さきうづまき  
涙して惜しむにあまりたうとかりもだせるまゝに今日をやらまし  
同じ世に生れし外のゆかりなきわれにはあれど君か死かなし  
今日一日ほのぐらき影世を蓋ふ君逝きませしそのけはいより  
黒はくの中にさやけき面影の此世の外に在すさみしさ

(十二月九日)

足はやく雲はしり行く冬の日は鳴く鳥にさへ心せかるゝ  
子がさらふ三味に虫の音通ひきていでゆの宿の夜は更けにけり